

## 『アルマンズ』における物語の構造化

高木, 信宏  
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9927>

---

出版情報 : Stella. 9, pp.129-147, 1991-03-15. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン :  
権利関係 :

# 『アルマンズ』における物語の構造化<sup>1)</sup>

高 木 信 宏

スタンダールの最初の小説『アルマンズ』については、その〈性的不能〉の主題を巡ってさまざまな解釈が試みられてきた。なかでも、〈性的不能〉を衰退しつつある貴族階級の象徴とする見方や<sup>2)</sup>、〈変愛〉の問題との関連から、彼の内的傾向と〈性的不能〉とのあいだに深い結びつきを想定する見方などがその代表的な解釈と言ってよいだろう<sup>3)</sup>。しかしながら、自家用本に残されたスタンダールの次の自筆ノートは、これらの論議とはまた別の観点からの〈性的不能〉にたいする位置づけを可能にするのではないだろうか。

完全に理性的な人物ならば耐えられるような不幸。しかし、情熱的な魂をもち、まさにある種類の幸福を誇大に思い描く人物にたいして置くことを思いつけば……

奇妙な動き、そしていかなる小説のなかでもまず絶対に描かれたことのなかった動き。[1427]

ここで注目すべきは、スタンダールがまずあらかじめある精神的な傾向・図式を戦略的に想定し、それに従ってひとつの具体的な状況を与えることで、従来の小説になかった「奇妙な動き」をつくりだそうとしている点である。つまり、「不幸」の因果論的な位置づけから判断するならば、〈性的不能〉を物語の構造化そのものを支配・決定する絶対的・先験的な要素としてではなく、あくまでもスタンダールの文学的戦略に応じて派生的・副次的に設定されたひとつの状況としてとらえることも可能だと考えられよう。したがって、〈性的不能〉にオクターヴの内的傾向が象徴的にあらわされているとする立場を本稿ではとらず、考察の対象をオクターヴに限定し、〈性的不能〉をスタンダールの心理分析的な方法を考察していくうえでの手掛かりとしながら、その人物像のなかに具現化されている人間心理、図式的にとらえられた心理を物語の展開とからめながら浮き彫りにする。

## 1. 情熱と想像力

性的不能を自覚したオクターヴは、どのような必然性のもとに〈恋愛〉を自らに禁じる誓いを立てるのだろうか。この問題を考察するにあたって、まず彼にとって性的不能がどのような意味をもつのかを検討しよう。アンドレ・ジッドの指摘にもうかがえるように<sup>4)</sup>、性的不能の事実は女性の愛情を醒めさせてしまうという言わば固定観念をオクターヴがもったことは、スタンダールの自家用本への書き込みや本文中の記述からもあきらかであり<sup>5)</sup> この固定観念のためにオクターヴが〈恋愛〉に対する絶望的な見方をもたざるをえなかったとしても不思議ではない。こうした観点に立つならば、オクターヴにとっての性的不能は、なによりもまず〈恋愛〉の実現を不可能にする絶対的な制約であると言えよう。ならば、彼が性的不能を患っていることよりも、女性に愛されないという観念に終始一貫して縛られていることこそ、物語の構造化における重要な前提として捉えねばならないのではないか。

では、このようなかたちで〈恋愛〉が〈不可能事〉となるのと並行して、「情熱的な魂」をもつオクターヴは、どのような「奇妙な動き」を見せるのだろうか。この疑問に答えるために、オクターヴの情熱が想像力と不可分に結びついている点に注目し、情熱的な想像力の働きがオクターヴにどのような影響を与えているのかを次のスタンダールのノートのなかに見てみよう。

ある奇妙でどうすることもできない不幸のために、彼〔オクターヴ〕は享受できないある種の幸福を過大に考え、また人生のなかで出会うであろうさまざまな出来事を非常に暗いイメージで思い描いてしまう。〔…〕自分が究極のものとして想像するある幸福が考えられないので、いかなる楽しみも、生きる労苦に値するように思えることも、彼の想像力は人生のなかに見いだすことができない。母親にたいする非常な愛情がなかったならば、自己の不幸を考えて、彼は人生に終止符を打っただろう。[1433]

オクターヴの想像力は、〈恋愛〉をこの世における至上の幸福として思い描いてしまうのだが、もちろんこの働きの背景に、〈情念〉の法則、すなわちあらゆる情念がその不可能性を自らの糧として燃えあがるという法則を見逃すことはできない。つまり、〈恋愛〉という〈不可能事〉は、情念と想像力の対象となることで言わば理想化されてしまったのだと言えよう。しかしながら、情熱的な想像力の作用を見ていくうえで、より重要なことは、このようなかたちでの〈恋愛〉の理想化そのものよりも、むしろこの理想化によってオクターヴと

日常の世界との関係が、必然的に反命題としてあらわれてくる点である。現実世界への深い絶望から、あるユートピアが希求される場合とは正反対に、彼の想像力はその渴望する愛のアイデアによって、むしろ現実世界の方を逆転的・倒錯的に位置づけてしまう。じじつ、このスタンダールの自筆ノートは、想像力によって恋愛が絶対化されてしまうのと全く並行して、現実世界にたいしても想像力によって、経験的な認識に先だち、否定的な価値づけがなされたことを示している。この否定的な価値づけも、やはり〈情念〉の法則の支配下にあることは十分にうかがえよう。なぜならば、恋愛にたいする憧憬が激しければ、それだけいっそう日常の生活はオクターヴにとって耐えがたいものになるというひとつの相関関係を当然そこに想定できるからである。しかも、「母親にたいする非常に愛情がなかったならば、自己の不幸を考えて、彼は人生に終止符を打ただろう」という一節は、この絶対化の程度が極限的なものであることを示している。換言すれば、〈恋愛〉か、しからずんば〈死〉か、という二者択一的な様相を呈するほどまでにオクターヴの情熱は熾烈なのであり、またこれこそがスタンダールの想定した心理的な図式だと考えられよう。

このことに関連して、究極の幸福を夢想するオクターヴと日常世界との関係がどのように描かれているのかを見なくてはならない。なぜならば、情熱的な想像力は、夢想という行動形態によって描かれているのだから。

オクターヴの目は、ときおり天空を見上げて、そこに見いだす幸福の影を映しているかのようなだった。だが、一瞬ののち、こんどはその目に地獄の責め苦が見てとれるのであった。[36]

ここでは、実現不可能な「幸福」が「天空」によって比喩的にあらわされているが、この2者の結びつきからは空間的・位相的な対応物として、「地上」と「不幸」との結びつきがネガ・陰画として浮かび上がる。情熱的な想像力のために「地上」、つまり日常世界は、オクターヴにとって真の幸福の実現がもはや望めない流瀆の地と化したのだと言ってもさしつかえない。しかも同時に、現実の生活は、彼の「感動の源泉となるどころか、彼を苛立たせるだけのもの」であり、まるで彼の気を散らせ、たいせつな夢想から彼をしつこく引き離しにやって来る」ものでもあるのだ。このように二重の意味で現実世界におけるいっさいのものが、経験的な認識によらずに否定的な対象としてまず限定されてしまったと考えてまちがいないだろう。したがって、世間から隠遁した僧侶

や化学者などの孤独な生活にたいする強い憧憬や、「人生における現実的なあらゆることにたいして」[36] まったく興味を示さないこと、そして他人とのあいだに「ダイヤモンドの壁」[108]を築く「人間嫌い」[30]であることなども、以上の議論と切り離して考えることはできまい。とりわけ、「ダイヤモンドの壁」は、『恋愛論』のなかのあの〈結晶作用〉の説明におけるダイヤモンドを連想させるだけに、オクターヴのこうした反社会的な傾向と情熱的な想像力の作用との密接なつながりを強く示唆するものであろう。

以上のような情念と想像力に支配されたオクターヴの内的構図を念頭におくならば、彼が自らに恋愛を禁じる誓いをたてる必然性を理解することもさほどむつかしくはない。極限的とも言える精神の危機にありながらも、母への愛情のために自殺ができないというディレンマのなかで、オクターヴが精神の危機的状况を克服するために何か生きる目的や支えを必要としたことは当然考えられるし、じっさいそのことはテキストによって語られているのである。

オクターヴは、いくたびも自らに課した誓いを心弱くも破ってしまったのだった。一瞬が、彼の生涯をかけた努力の所産をついえ去ってしまった。彼は自分自身への畏敬のための一切の権利を失ってしまったのである。世界はこののち彼にたいして閉ざされたも同然だった。なぜなら、そこで生きていくだけの力を、彼はもっていなかったから。[112]

生きていくためにオクターヴが必要としたのは自分自身にたいする尊敬の念である。そこから逆に、彼がネガティブな自己評価・劣等感をもっていることもあきらかになる。しかも、「運命も、おれを絶えず惨めであるような存在にしたあとで、おそらくこのような償いをせざるをえなかったのだろう」[143]という内的独白が、彼の否定的な自己評価が、性的不能の事実と直面した時に始まったものであることを如実に示していることから、このような自己意識の根底には、絶対的な〈幸福〉から隔絶された存在としての自己の位置づけ、つまり情熱的な想像力の影響があると考えられよう。したがって、オクターヴの自尊心への願いは、生きるうえで自己評価の暗い穴をなんとか埋めなければならぬという差し迫った内的要請なのであり、彼の誓いは至上の〈幸福〉との断絶で生じた自己の否定的な位置づけそのものを、運命と闘うという貴族的のストイシズムの美德によって、肯定的なものへと転換・昇華しようとする動機にもとづくものであることが理解できるのである。

しかしながら、オクターヴの誓いがかつ真の重要性は、〈恋愛〉にたいする

情念の渴望と、派生的に生じた自尊心にたいする意志の希求とを対立させ、言わば両者の相剋状態をつくりだし、アルマンスとの愛をめぐる熾烈な葛藤を準備する点にある。ジョルジュ・ブランは、「悲壯感 «le pathétique» は、オクターヴが愛せないのではなく、愛してはならないところからくるのだ、なぜなら彼は自分で誓いを課したのだから」と述べているが<sup>6)</sup>、しかしながらより厳密には、オクターヴの意志が情念に対して勝ち目のない闘いを挑むことにこそ、悲壯感は生まれるのだと言わねばならない。なぜならば、誓いの達成は、じつはオクターヴ自身の死にほかならず、したがって誓いの遵守でえられるのは、自分自身への尊敬の念に対するまさに「権利」にすぎないからである。見方を変えれば、オクターヴが超克しようとする否定的な自己意識は情熱と想像力の産物なのだから、〈恋愛〉への憧憬が完全になくならない限り、激しい情念と想像力が絶えずもたらす幸福感の欠如を、彼は意志の力によって一生補いつづけなければならないのだ。絶えず自尊心に糧をあたえる必要から彼が「義務の権化」となり、「その瞬間ごとに自分の幸福を測定しよう」とする強迫的な習慣の虜となっていることが、そのことを如実に物語っている。このようなオクターヴの姿こそ、誓いや義務への固執とは裏腹に、自己の名誉を求めるかたちでは真の幸福感をけってえられないことを示しているのだから。次の記述は、誓いを自らに課したことで、オクターヴがこのような宿命的な存在になったことを暗示するものではないだろうか。

15の歳からオクターヴはこんなふうであった。しかし、マリヴェール夫人は、彼がなにか密かな情熱をもっているのではと真剣に考えたことは一度もなかった。オクターヴは自らのあるじであり、自身の運命のあるじではなかつただろうか。[36]

誓いを立てた15才のときから、オクターヴは〈変恋〉を拒絶し、自己と自身の運命を支配しようとすることによって、逆説的に〈恋愛〉の可能性を内に宿してしまったのだというスタンダールの反語をこの一節に読みとれよう。

## 2. オクターヴのメランコリー

スタンダールは小説のプランのなかで、主人公のメランコリーの発作について因果論的な説明を付し、「主人公は心を乱し激昂するが、それは彼が自分が不能者であると感じるから」であり、「女性的な魅力の間近に見ることができるときに彼の不幸は理性を失わせてしまう」[1428]のだと述べて

いる。ここでは、想像力ゆたかな「情熱的な魂」をもつ主人公がこのような反応を見せることは真実らしいし理にかなっているというひとつの考えがうかがわれよう。しかしながら、「女性的な魅力」に接して逆上した主人公の姿が、読者にとってその秘密を見抜くための申し分のない鍵になるとは考えにくい。ジェラルド・ジュネットが指摘するように、性的不能についてのオクターヴの思考は小説全体にわたって隠蔽されており<sup>7)</sup>、逆に読者はメランコリーの発作を手掛かりにして独白にもあらわれないこの思考の所在について推測することになるのである。したがって重要なのは、メランコリーの発作が性的不能の病よりもむしろ情熱的な想像力について設定された図式、つまり自身の「不幸」を意識するや理性を失うという図式であり、これにもとづいてオクターヴの心理が展開されている点なのである。このような観点から、オクターヴの理性のありかたに注目しながら、彼のメランコリーがどのように描かれているのかを考察しよう。次の引用は、賠償法の通過の噂が広まったボニヴェ邸のサロンの場である。

一度だけ、ある地方出の下院議員が、200万フランのことでオクターヴにむかって、自分はあなたに一票を投じるつもりだ（これがこの男の言葉である）、というへたくそな世辞を言ったときに、オクターヴはアルマンスの視線が自分にそそがれているのに気がついた。その眼差しの表情は見誤りがたかった。すくなくとも、ひとには想像もつかないほどきびしい彼の理性はそう決めつけた。その眼差しは彼を観察すべく向けられたのだ。そして、彼をひどく喜ばせたことには、その視線には軽蔑せざるをえないだろうという期待があった。[40]

地方出の下院議員がオクターヴに話したことは、金銭的なことを喚起すると同時に、マリヴェール家がおかれた惨めな経済状態にも触れることでもある。このような発言は洗練を欠いたブルジョア的な露骨さ、憤みや恥の感覚のなさを共示し、また発言の心理的背景には、革命以前のサロンでは考えられないようなある種の対等意識を見るならば、不遜なニュアンスをも感じさせるものだ（この点において、この短い叙述は時代の変遷をリアルに反映しているといえよう）。ただちにオクターヴは、アルマンスの眼差しにあらわれた期待に答えるべく、この田舎者にたいして公然と侮蔑的なあしらいをとるのだが、このことはふたりのあいだにある種の意思の疎通があるという印象をあたえる。だが、この直後にダンクル公爵夫人のアルマンスにたいする誹謗を根拠もなく鵜呑みにしてしまうオクターヴの姿から、じつはこの場面で彼がアルマンスの心

中を本当には理解していないことが一転してあきらかになるのである。

たちまち、アルマンズの沈黙の意味があきらかになった。オクターヴの頭のなかで彼女はたったいま非難されたようないやしい感情をもっているのだと認められたのである。[41-42]

このサロンの場景においてアルマンズはオクターヴに一度も語りかけず、また彼女がなにを考えているのかも、先ほどの眼差しの記述を除いては触れられていない（それがあきらかになるのは第4章においてである）。焦点があてられているのはオクターヴの思考であり、場景全体をとおして見てもアルマンズに記述がおよぶのは、すべてオクターヴの思考とのかかわりにおいてである。この点から、オクターヴの心理の流れ自体をクローズアップしようとするスタンダールの意図が浮かびあがるのだが、ではなぜオクターヴはアルマンズにたいする考えを一変してしまうのだろうか。この唐突な転回を動機づけ正当化するような事実も、またアルマンズにたいする彼の潜在的な疑念も描かれていない。そうであるだけにいっそう、彼女の眼差しにたいするオクターヴの強固な確信と、中傷を真に受けた彼の頑なな非難とがコントラストをなし不可解な印象を生むのである。同時に、それらの判断をくだす理性自体が、作者の言う「ひとには想像もつかないほどきびしい理性」のあり方が、読者によってとうぜん問われることになるのだ。この2つの対照的な判断から浮き彫りになるオクターヴの「理性」の動きとは、慎重さと反省の欠如であり、直観的な盲信なのである。このことは、彼にアルマンズを断罪したことへの反省と懸念が生じるきっかけが、新聞のなかに偶然目にした「とりとめもない一語」[51]という、なんの脈絡もない事柄である点にも示されている。つまり、なんら反省をうながす客観的事実に出会うのではなく、心の平静をとりもどすのと並行して自然とオクターヴが反省に至ったことを、この出来事が物語っているのである。このようなオクターヴの盲目的な判断は、「メランコリーの発作」においてはより顕著にあらわれているのではないだろうか。召使を窓から投げた例でも、ことは召使のしぐさを彼が独り合点したことに起因しているのであり、また兵隊たちと喧嘩した例でも同じことが考えられる。「ひどく腹が立ってたんです。兵隊たちが僕のほうを見て笑ったから喧嘩をふっかけたんです」[47]という説明に込められたつよい主観性に、その一端がうかがえるからだ。ただ、これらの例とは異なり、サロンの場景ではオクターヴの激昂の心理的背



景やその原因が、「女性的魅力」や「極端な凶暴さや度を越えた意地悪さ」[45]という直接的なかたちではあらわれていない。それでは、オクターヴの発作はどのような契機にもとづいておこるのだろうか。

第2章でもっともオクターヴの思考をしめるのは〈金銭〉にかんすることである。賠償法の可決の見通しの報せを父親から受けてから、サン＝ゴバン鏡の購入を夢想するにいたるまで、彼の思考は200万フランから離れることなく展開していく。だが、彼の独白にあらわれる貴族たちの拜金的な態度やアルマンズの沈黙などへの関心とはべつに、この金が父親の意向による縁組を可能にするという点においてこそ、200万フランはオクターヴの心境を左右するほどの隠れたモチーフとなっているのであり、このモチーフは第1章での母親との対話でのオクターヴが賠償法に反対する理由、「そのために僕は結婚させられるから」[34]ということばによって準備されているのだ。結婚ほどオクターヴに「不幸」を喚起し、彼を窮地に追い込むものはない。そのことは、アルマンズとの婚姻の成立とともにあらわれる「メランコリーの発作」や、自己の秘密を告白しようとして見せる異常な逡巡からもあきらかであろう。ここで「絶望の発作」の心理的背景も、賠償法の200万フランが可能にする婚姻への恐れなのだ。だが問題は、この結婚への恐れが明確なかたちであらわされないまま物語が展開していく点であろう。ボニヴェ邸を飛び出したオクターヴは、自己の呪われた宿命を思い、自殺の想念にとらわれる。

〔…〕生きることが自分にとってあまりにもつらい苦しみならば、母さんよりも先にこの世におさらばしてもいいわけだ。こんな許しを乞うことができるとしたら、母さんはおれにそのことを許してくれるかもしれない……。あの一等騎士や、父さんでさえも！あの人たちはおれを愛しているのではなく、おれがもった名前を愛しているんだ。つまり、おれのなかにある野心の種を大切に思っているのだ。おれを彼らに結びつけているのは、まったくとるにたりない義務でしかないのだ……。この〈義務〉という言葉は、オクターヴにとって雷の一撃のようであった。[43]

由緒ある家名にたいする義務、「自分にのこされた唯一の義務」が、彼に自殺の考えを捨てさせ、「自尊心とともに、いくぶんかの生氣と勇氣」を彼にとりもどさせる。このように一転して、彼はメランコリーの発作から回復へとむかうのだが、この家系への義務は、名と財産を継承させていくことにあるのだから、とうぜん婚姻というかたちをもって遂行されなければならない。したがって、「新たな観点をえて生きる苦しみをのりこえる誓い」を立てたオクターヴ

は、賠償法により一步現実化してあらわれた結婚という困難な問題に立ち向かう決心をあらたにしたのだと言えよう。そしてこの心境の変化は、オクターヴの200万フランにたいする態度の変化に象徴的に反映されていく。自室を改築して「ボニヴェ邸みたいな豪華なサロン」[43]をつくり、サン＝ゴバン製の姿見を買う計画に無邪気に熱中するのも、彼の心境の変化とまったく並行するかたちで、200万フランの位置づけが肯定的なものに転換したのだと考えてもさしつかえない。このように見てくれば、「絶望の発作」にとらわれた翌日にオクターヴが見せる次のような心理の揺らぎも無理なく理解できよう。

その日はそれからあとずっと、マリヴェール侯爵、スーピラーヌ一等騎士そして夕食に招かれた二、三の親しい知人たちの会話は、オクターヴの結婚と彼の新しい地位についてのかなり趣味の悪いほめかしにほとんど終始していた。その前夜耐えねばならなかった精神的な危機がまだ心を揺さぶっていたので、彼はいつものようには冷静ではなかった。[50]

もはや、結婚の気運がオクターヴのメランコリーの隠れた引き金となったことはあきらかである。さらに、つづく彼の次の言葉に、結婚にたいする義務感とその困難と闘う決意を見てとることができよう。

自分が軽率だと言われているのをいいことに、たとえ王子になっても26までは結婚するつもりはない、と彼は宣言した。それは、彼の父親が結婚した歳だったのである。[51]

だが、ここで自ら結婚に猶予期間をもうけたことからあきらかなように、オクターヴは結婚にたいする恐れを完全に克服したのでない。『愛なき結婚』の一場面、若妻が夫に寝室の鍵をかえす場面に耐えきれずに、彼が劇場を飛び出すことからそれはうかがえるのである<sup>8)</sup>。以上の考察から、オクターヴの思考に直接にはあらわれない結婚の問題が、じつは彼の理性と感情に一貫しておおきな影響力をあたえている要因であることはあきらかであり、またこのモチーフは内的独白などの手法による直接的なかたちではなく、われわれが見たように〈遠回し〉な方法で展開されているのである。また、第1章から第4章までの物語の展開はアルマンスに恋心を抱く以前のオクターヴの姿を描いているのだが、そこには自尊心の希求と絶望が交互する構図を認めることができ、さらに、自らに誓いを課したにもかかわらず、メランコリーのさなかにオクター

ヴが恋愛を無意識のうちに夢想し絶望してしまうことを考えれば、彼のメランコリーは意志と情念の相剋がもたらす理性の空転状態であるととらえることもできよう。

### 3. 内的葛藤のドラマ

オクターヴは、アルマンスとメリー・ド・テルサンとの会話を偶然耳にし、自分がアルマンスの尊敬を失ったことを知り愕然としてしまう。アルマンスとの恋愛の契機となるこの出来事について、スタンダールは小説のプランのなかで、「彼〔オクターヴ〕はこの尊敬を取り戻そうと努める。このことは、自分では気づかずに、彼が愛を抱き、また相手に愛を抱かせるために、絶対に必要なことなのである」[1429]と説明しているのだが、なぜこのことが不可欠の条件となるのかを考えてみたい。この情景においてオクターヴはアルマンスにたいする自分の誤解を悟るのだが、しかし心理的なレヴェルでとりわけ重要な価値を担っているのは、自分が尊敬されていたという事実が彼が恍惚となってしまうことである。もちろん、ナルシズムの色調を強く帯びたこのようなオクターヴの姿は、自律的・克己的に自分自身への畏敬を希求せざるをえない彼の孤独な状況を考慮するならば、その必然的な結果・反映として受けとめねばならないものだ。彼はナルシシスチックな閉塞状況に否応なく追い込まれたのであって、彼を尊敬するアルマンスという存在こそが、固く閉ざされた内面世界を外部世界へと開くために、彼に唯一残された出口なのだとさえよう<sup>9)</sup>。

このような現実の不幸のためにオクターヴはいつもの暗い憂鬱から気が紛れ、その時々自分が享受している幸福の量を、絶えず見積もろうとする習慣も忘れていた。〔…〕しかし、この不幸は、それがどれほど辛いものであったにせよ、かつて感じていた人生にたいする深い嫌悪感を、彼に起こさせることは決してなかった。[55]

このようにアルマンスの尊敬を失ったという「現実の不幸」は、その尊敬の回復という自発的な行動をうながす具体的な目的をオクターヴにあたえるばかりか、たとえ「義務の声」[30]や「一見きわめて筋のとった行動計画」[42]などにいかにも忠実であっても感じずにはいられなかったあの「人生にたいする深い嫌悪感」を不思議なことに彼にまったく抱かせていない。ここにも、オクターヴの自律的・内閉的な自己評価のシステムに依存した自尊心の追求が、じつは生の充溢感をともなわない不毛な試みであることが露呈していると言えよ

う。オクターヴの自尊心を充たすためになによりも不可欠なのは、尊敬する他者から評価されることにほかならないのだ。だが、さらに重要なことは、オクターヴと尊敬心で結ばれるアルマンスは、必然的に彼の恋の対象となりうるといふ点である。なぜならば、ほんとうに彼が激しく憧憬しているのは「きよらかな魂」をもつ女性を献身的に愛すことなのだから<sup>10)</sup>。

アルマンズの尊敬を取り戻したオクターヴの「新しい生き方」[80]がはじまり、彼のものの見方にも大きな変化がおとずれる。情熱的な想像力による一種の先入観を離れて、少しずつありのままの現実の世界を認識しはじめるオクターヴは、以前のようなメランコリーの発作に陥ることもなく、「以前からずっと目のまえにあったのに、まえはけっして彼の注意をひかなかった事柄が社交界にたくさんある」ことに気づき、「世界は以前ほど嫌なものとも、とりわけ、自分に害をあたえようとするものとも」[81] 思えなくなる。「行動への欲求と、なにか真新しい事物を観察したいという願望」が彼のなかに生まれ、「幸福になって以来、彼は一種の本能から人々のなかにすすんで交わる」ようになり、人々を支配したいという欲望にめざめる。さらに、「ボニヴェ邸の人々と親しくなるまえの自分の生活は、気違いじみており思い違いだらけだった」[84] という反省が生まれ、またその「自分自身にたいする理性的判断から、青春期のはじめに彼のすべての行動を律していた、峻厳で苛酷で、その苛酷さ自体に自己満足していたようなあの論理癖の痕跡」[99]が見られなくなるのである。オクターヴが現実の世界の事象について洞察力を発揮するのは、このような幸福な一時期であり、じじつ彼の目をとおした社会風刺的なまとまった記述もこのあいだに集中している。したがって、オクターヴの目をとおした社会風刺を問題にする場合には、＜幸福＞への絶望からくる疎外感の反映をしりぞけて、社会的・心理的なコンテクストだけに焦点をあてて判断すべきであろう<sup>11)</sup>。王政復古時代の貴族たちや、その社会のありようをとらえるとき、彼はフランス革命を準備したかつての倫理的・思想的な立場に依拠しているのであり、政治的・思想的な事柄に触れずに音楽や芸術などの話題に終始するサロンの人々の欺瞞的な態度にたいするオクターヴの批判は、『赤と黒』のジュリアン・ソレルにも受けつがれているからである。

しかしながら、この幸福な時期においても、オクターヴの世界観にたいする情熱的な想像力の影響が完全に払拭されたのではない。それは、「いままでよりすこしは社交界をありのままに見る」[85]などの内的変化をしめす記述がいずれも若干の留保をとまうことからも窺われるが、アルマンズへの次の語

りかけではさらに明確なかたちで示されている。

「高慢さのために、ぼくは自分と他人とのあいだにダイヤモンドの壁をきずいている。でも、きみがいると、乗り越えがたいこのダイヤモンドの壁も消えてしまう。きみをまえにすると、ぼくはものを悪意に解釈したりしない。それほどきみの存在は、ぼくの魂に安らぎをあたえるんだ。でも残念ながら、どこへでもきみを一緒に連れて行くための魔法の絨毯をもっていないのだ」[108]

オクターヴは、アルマンズがそばにいないと自尊心が邪魔をして理性的なものごとを判断できないことへの苦悩をあらわにしているのだが、なぜ彼の理性がアルマンズとの関係による特異な限定を受けるのか、そしてなぜ彼が自分の高慢さに苦悩しなければならないのかという問題は、意志の力ではどうにもならない情念の働きを考えねば理解できまい。スタンダールの心理的な図式にしたがえば、究極の〈幸福＝恋愛〉に到達するか、それへの熾烈な渴望が失われなにかぎり、〈恋愛〉への絶望の派生物である自尊心の希求と不可分にむすびついた「ものを悪意に解釈」する傾向はオクターヴから完全にはなくなることはない。あきらかだからである。そして、この傾向がアルマンズと一緒にだど一時的に姿を消す点についても、オクターヴが彼女への恋を友情と取り違えている現段階では、彼女と親しく接することで、われしらず自身の理想を実現しつつあるのだとも考えられ、因果論的に見ても当然のことと言えよう。また、アルマンズの態度までも「悪意に解釈」してしまったオクターヴの心理がここでは大きく変化していることから、恋愛感情の発生が先述したサロンの场景よりも後であることが裏づけられる。

ドーマール夫人のこぼれにより、オクターヴは自分がアルマンズを愛していることを悟り愕然とする。情念のまえに意志が敗北するこの決定的な場面はひとつの山場とも言え、アルマンズとの「至福の絶頂」から、「絶望的で恐ろしい不幸」[112]へと物語は最大のコントラストで心理展開を見せるのだが、つづいて描かれるオクターヴの精神の危機、「これ以上に精神的苦痛は過酷になりえない」と語られ一種の幻覚症状を見せるほどの危機的状況には、いったいどのような心理的背景があるのだろうか。「自分の支えとして俺がもっていたのは自分へ尊敬だけだったのに、〔…〕俺はそれを失ってしまった」[114]というオクターヴの内的独白が示すように、誓いを破った彼には人生の支柱であり最大の目的であった自尊心の希求の道が閉ざされてしまう。さらにここで注目すべきは、「あれほど彼の胸に深く刻みこまれていた母を思う愛情もいまは

消え失せていた」[116]とあるように、かつてのオクターヴに自殺を踏みとどまらせていた唯一の歯止めさえもなくなってしまっている点である。これらの新たな展開に、かつて人生に絶望しても母を思うあまり死ねず、〈恋愛〉の否定によって人生の肯定を試みた男が、生きる基盤を完全に喪失し、ふたたび絶望の淵に転落する構図があきらかに見てとれよう。むろん、この新たな状況を以前の危機状態への回帰としてとらえることもできるが、しかしかつての状況と大きく異なる点は、夢想において絶対化された〈恋愛〉がアルマンズという実在をえて具現したこと、そして誓いの違反への過酷な自責の念が生じたことである。すなわち、アルマンズへの熾烈な思いにもかかわらず、オクターヴに違反への自己懲罰の動機が急速にあらわれたことにほかならず、彼の内的葛藤はまずこの両者に引き裂かれるかたちで描かれている。したがって、この内的葛藤を解決するためにオクターヴに許される選択は、必然的に2つしか残されていないということである。つまり、アルマンズとの恋愛の成就か、死か。スタンダールが描こうと狙ったものは、こうした緊迫したオクターヴの葛藤であると言っても過言ではない。物語の後半の展開は、2人の恋人の繊細微妙な恋愛心理を織りこみながらも、なによりもオクターヴの精神が演じる劇によって、その劇的緊張を支えられているのである。

誓いの違反以後、オクターヴの最初の考えはまず、彼女に迷惑がかからないかたちで自身の人生に終止符を打とうという決意にいきつく。そうした彼の決意を反映してか、クレーヴロシュ侯爵との決闘で瀕死の床につき、アルマンズと愛を告白しあうまで、彼の葛藤は、内的独白や語り手によって、「義務の声」「良心の声」と「誘惑の声」との相剋というかたちで描かれる<sup>12)</sup>。だが興味深いことに、自己の死を確信し、彼女との愛の告白による至福のなかで、こうした対立の主観的な布置が逆転してしまうのだ。

けっして恋をすまいと自分に誓ったとき、おれは人間の力を超えた責務を自分に課したわけだ。だから、いつもおれは不幸だったのだ。しかも、そんな酷い状態が5年もつづいたのだ！おれは、この世に実在しようとは考えられなかったほどの心をもったひとに出会った。運命が、おれの狂気の裏をかき、おれを幸福にめぐりあわせようとしているのに、このおれはそのことに屈辱を感じ、憤慨せんばかりのありさまだ！〔…〕誓いを破ったとおれを非難しようにも、いったい誰がおれの誓いを知っているというのだ。[144]

ここでオクターヴが自らの誓いを「人間の力を超えた責務」ととらえ、「自分

の名誉と幸福のため」[143]の過去の営為にかかわらず自分が「不幸」であったことを率直に認めている点から、彼のなかで意識上の価値転換があったことがはっきりとうかがえ、また彼の自尊心への希求自体が恋愛への憧憬に比して派生的・副次的なものにすぎないことをも確認することができるのである。オクターヴは自分の不幸の原因自体について、「自分の行動を生活のなかでぶつかる出来事に適合させるのではなく、いかなる経験にも先だったひとつの規則をおれば自分につくりあげていたわけだ」[144]、と総括してみせるが、しかし彼はこうした傾向の真因である自分のなかの〈恋愛〉の絶対視に思っていたわけではない。究極の〈幸福〉である恋愛の実現がこんどは彼の内的葛藤の解決となったのであって、〈恋愛〉か〈死〉かという二者択一的な解決を要する情熱のシステム自体が超克されたわけではないのだ。このことは、「オクターヴはアルマンズのそばでなければ完全に幸福になれなかった。彼には彼女が目のまえにいることが必要だった」[144]と描かれた、意志の力ではどうにもできない自身の精神に強迫された男の不安定にも示されているのである。

しかしながら、この実現された幸福はかろうじてたもたれているのにすぎない。オクターヴの幸福はアルマンズが申しでる条件、ふたりの交際は絶対に結婚を前提としないという条件によって成立しているのである。さらに、スタンダールが小説のプランに残した、「偶然が彼〔オクターヴ〕に味方し、恋人は彼に求婚しないことを誓わせる」[1429]という記述からも、この条件が物語を展開させるうえできわめて重要なものであることは間違いない。じじつ、物語はふたりが結婚せざるをえない状況をつくり出すことで、この条件でもたらされた幸福なふたりの関係を悲劇的な結末へと導いていくのだ。「彼にたいして、彼女は、もし彼が結婚しなければ自分の貞操に傷がつくような危険をおかして」[1429]しまい、2人の婚約が成立する。そして、自己の秘密を告白せねばならないという婚約者としての義務感から、憂鬱の発作をみせるほどの葛藤をあらわにするのだが、この葛藤の構図において義務と対立するのは、オクターヴの恐れ、すなわち自己の秘密を告白すればアルマンズの愛情を失うのではないかという激しい懸念なのである。ここであらためて、性的不能の事実は女性の情熱をさめさせるというオクターヴの固定観念が、作品の構成上きわめて重要であることを指摘しておこう。差し向かいでアルマンズに秘密を打ち明けようとする情景で、彼が格闘しているのはじじつは彼自身の観念にほかならず、つづく彼女への手紙にそのことが明確に語られている。また、オクターヴがこの懸念を乗り越えるのに、彼の秘密を誤解したアルマンズからの天使のよ

うな善意にみちた手紙をまたねばならず、このような物語の展開をとらえるうえで彼女の誤解を準備する「monstre」[175]というオクターヴの両義的なことばの果たす役割に着目しなければならない<sup>13)</sup>。さらに、告白にたいする恐れが弱められていく過程を読みとるならば、アルマンズの心情の誠実さを確信し、相談相手ドリエ氏の忠告に大いに勇気づけられながらも、あと一步というところで告白が成立しないのも、スーパーヌ氏とボニヴェ騎士による偽造の手紙のためばかりとは言えまい。オクターヴが告白の手紙をすぐに投函せず、偽手紙を見つけるオレンジの鉢のなかに託そうとしてしまうのも、「手紙を遅らせようというこの考えのなかに、やっと克服したばかりの感情的偏見の最後の眩惑をオクターヴは認めるだけの洞察力がなかった」[179]と語られているように、彼自身の「羞恥心」[178]や「気おくれ」[179]のためであり、それらは彼女の反応を先取りする彼の恐れ・懸念の弱められた感情であるだけに、悲劇は彼自身の側からも招かれたのである<sup>14)</sup>。アルマンズの心変わりを畏怖するオクターヴが偽造の手紙を読んで絶望するのは、こうした物語の展開からみて必然的なことだと言えよう。そして、絶望が<死>にそのまま直結していくのも、すでに述べたように、誓いを破ってしまったオクターヴには究極の<幸福>の実現、すなわちアルマンズとの恋愛だけが人生のすべてだからであり、「彼はこの世にありながら死んでいた」[187]という姿にそのことを見ることができよう。

ギリシャへ船で向かう情景で、オクターヴは<死>の想念がもたらす澄んだ心境のなかでアルマンズ宛の手紙をしたためる。そして、自己の秘密の記された手紙と偽造の手紙をそれに同封するのだが、「この最後の瞬間ほど、オクターヴは最も優しい愛情の魅力の虜になったことはなかった」のであり、「自身の死の種類をのぞいて、いっさいを彼のアルマンズに語る至福を」[189]自らに許し与え、日々喜びをあらたにしながら最後の日まで手紙を書きつづけるのである。この不可解な印象をあたえるオクターヴの姿は、いったいなにを意味するのだろうか。ここで注目すべきは、「すべてを語る」というオクターヴの行為であろう。アルマンズとの未来に絶望した彼に残されているのは、不幸と幸福にいろどられた彼女との思い出しかないのだが、このことから単純に彼がそうした過去に退行的に浸っているのだとは言えまい。ここでオクターヴが甘美な至福を享受するのも、アルマンズにすべてを物語る事が、ふたりの過去を新たな姿のもとに蘇らせることにはほかならないからである。すなわち、彼は自己の秘密を明かすことで、以前の不可解で奇妙な自分の言動の真の動機や



理由を、さらには数々の献身の証を、はじめて彼女に包み隠さずに物語る事が可能になるのだ。自己の誓いにはじまり、愛を失う恐れと告白の義務との葛藤などを、過去の自分を見晴らす次元で語るという自己劇化のなかで、情念と想像力は悲劇におわった自己の人生を賞揚するのである。さらに、すべてを語ったオクターヴが、自己の物語の結末、すなわち自殺という最大の自己犠牲の事実だけをアルマンスに伏せたことこそ、自身の最後を彼女にたいして最も崇高に語ったことにほかならず、オクターヴの精神の高揚に自己劇化のもたらすカタルシスを認めないわけにはいかない。そして、手紙を読んだアルマンスが、伝えられた彼の死に方に実際に疑念を抱いていることから、彼自身の手による物語が完結したものであることは疑いようがないのである。

## 結 語

作中人物の創作にあたってスタンダールがある内的傾向・図式を想定している点に着目して、アルマンスとの恋愛をめぐるオクターヴの葛藤がどのようにして構成されているのかという問題を探ってきた。情熱と想像力の働きによって〈恋愛〉への熾烈な渴望がオクターヴに生じると相関して、〈死〉へと彼を誘うほどの人生への深刻な絶望が生じるというひとつの図式こそが、この物語を読み解くうえでのきわめて重要な鍵であると言えよう。〈恋愛〉を否定し自分自身への畏敬によって人生を肯定すべくたてられた誓いや、〈恋愛〉か〈死〉かという二者択一的な解決を要する彼の内的葛藤の構造などは、この抒情詩的ともいえる図式を背景にしているのである<sup>15)</sup>。そして以上の考察によって、誓いの違反から自殺にいたるまで、〈恋愛〉と〈死〉の契機が交互にオクターヴにおとずれるかたちで劇的緊張を高めながら物語が展開される仕組み、別言すれば、現実の世界では不可能だと考えた究極の〈幸福／恋愛〉の実現へとオクターヴが上昇しながらも、ついに墜落してしまう構図もあきらかになったのではないか。

本稿では〈性的不能〉の原因自体の考察は保留して作品の解釈を進めてきたが、それは〈性的不能〉はオクターヴの内面や存在様式を象徴するものではないのではないかという疑問から出発したからである。この点にかんして最後にひとこと付言するならば、物語において〈性的不能〉は本質的な問題として扱われておらず、あくまで「情熱的な魂」をもつオクターヴの精神の劇を構造化する具体的な状況としての重要性しかもっていないということである。しか

も、構造化の状況という点においても、〈性的不能〉はけっして絶対的なものではない<sup>16)</sup>。なぜならば、女性と閨房を共にするのを避けさせるなんらかの支障、女性を幻滅させる恐れがあるゆえに告白が憚れるような支障であれば条件として十分に充たされるのだから。「真のバビランは、告白する窮地に陥らぬために自殺すべきである」[191] というスタンダールの命題が、「告白」に重点がおかれていることも、こうした点から理解すべきだろう。むしろ、〈性的不能〉に主題的な重要性がないというわけではない。古典主義的な〈真実らしさ〉がまだ優勢な当時のフランスの文学的状況において、性的不能者による情熱的な恋愛というテーマは十分に逆説的な価値、いわばあえて賭に値するだけの価値をもっていたのだ。そのことは、他者の理解をえるためにスタンダールがこの「バビラン」についての命題、〈反=通念〉的な命題を自ら掲げている事実にうかがうことができるのである。

## 註

- 1) 訳出・引用には、主にプレイアッド版 (*Romans et nouvelles I*, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1952) を使用したが、一部補足的にガルニエ版 (*Armance ou quelques scènes d'un salon de Paris en 1827*, Paris: Garnier Frères, coll. «Classiques Garnier», édition illustrée, 1962) も使用した。したがって、訳出・引用箇所のページ数はプレイアッド版の場合には本文と註のなかで [ ] 内に数字のみを示し、これと区別するためにガルニエ版のページ数は [ ] 内の数字・ギリシア数字の頭にアルファベット大文字の G を置いた。
- 2) アンリ＝フランソワ・アンペールは、〈性的不能〉を没落する貴族階級の象徴とする解釈を提出している。Voir Henri François IMBERT, *Les Métamorphoses de la liberté*, Paris: José Corti, 1967, p. 400.
- 3) ショウシャナ・フェルマンは、〈性的不能〉がオクターヴのナルシシズム、つまり他者を愛することの不可能性を象徴するものと考える (voir Shoshana FELMAN, *La Folie dans l'œuvre romanesque de Stendhal*, Paris: José Corti, 1971, pp. 181-184)。また、ミッシェル・クルゼは、「バビランは想像力に恵まれた人であり、かつその犠牲者」であるとし、その特異性として「熾烈な欲望や恋愛をありふれた事柄にしまいとする欲求、そして極端に行動的でないこと」を挙げ、オクターヴの存在様態に絶対を望めば望むほど、それだけ現実において行動ができなくなるというディレンマを見ている (voir Michel CROUZET, «Le Réel dans *Armance*. Passion et société ou le cas d'Octave: étude et essai d'interprétation», in *Le Réel et le Texte*, Paris: Armand Colin, 1974, p. 97)。
- 4) André GIDE, «Préface» à *Armance*, réimpression de l'édition Champion,

Genève: Cercle du Bibliophile, 1967, pp. VII-VIII.

- 5) そのようなオクターヴの考えは本文中の次の記述にあらわれている——「たとえあなたにたいしてであっても、こんな致命的なことばを口にする勇気を、いつでも持てるわけではないのです。[…]なぜなら、あなたが私に抱いてくださる気持ち、私にとってはすべてであるその気持ちを、このことばが醒めさせてしまうかもしれないからです」[177, 強調引用者]。また、次の自家用本のノートにも、性的不能の事実に女性は幻滅するというオクターヴの考えを見ることができよう: «Es-sayer faire deviner l'*impuissance*, mettre ici: *et comment en serais-je aimé?*» [1435, 強調はスタンダール]。
- 6) Georges BLIN, «Étude sur *Armance*», in *Armance*, Paris: Éditions de la Revue Fontaine, 1946, pp. XIX-XX.
- 7) ジェラルド・ジュネットは『物語のディスクール』のなかで、『アルマンズ』においてスタンダールは心理分析をおこなっているのにもかかわらず、主人公の思考内容の隠蔽操作をしているとするジャン・ブイヨンの分析を批判・継承し、『アルマンズ』を作品全体にわたって性的不能にまつわる思考が主人公の脳裏から意図的に省略された作品、内的焦点化のコードの変調 (altération) における黙説法 (paralipse) のひとつの例として挙げている。Voir Gérard GENETTE, «Discours du récit» in *Figures III*, Paris: Seuil, 1972, p. 212.
- 8) アンリ・マルチノはその校訂版の注釈で、この鍵をかえす場面が性的不能のオクターヴにとって苦痛なのは当然であると指摘している [G 276 参照]。
- 9) オクターヴのナルシシスチックな傾向については、モーリス・バルデーシュが言及している。Voir Maurice BARDÈCHE, *Stendhal romancier*, Paris: La Table Ronde, 1947, pp. 139-142.
- 10) 第2章でオクターヴは貴族たちの拜金主義的な態度にたいする嫌悪から、そのような墮落に染まっていない自分の理想の女性, «une belle âme» を思い描くのだが [42], 第5章のこの場景で「雷の一撃」のように彼をとらえるアルマンズのことばが «une âme que je croyais si belle» [53] であることは興味ぶかい。オクターヴに結晶作用がおこるモメントが、純真さと誠実さのこもった «*que je croyais si belle*» という彼女のことばにより、前述のオクターヴのことばに反響するかたちで描かれている。
- 11) ジャン・プレヴォは、『アルマンズ』における真の主題が、「世の中と幸福から自分が永久に隔絶したと信じた人物」による新しい視点によって社会のさまざまな事象をとらえることにありと述べているが、しかし世間から隔絶した意識がオクターヴの考えにつよく反映されるのがメランコリーのときであることを考えれば、この解釈には留保をつけざるをえない (voir Jean PRÉVOST, *La création chez Stendhal*, Paris: Mercure de France, 1951, pp. 228-229)。しかしまた、モーリス・バルデーシュのように、オクターヴによる社会の事象にたいする批判をすべて、疎外された「ひとりの病人によってなされているがゆえに」無価値であると断定もできないだろう (voir BARDÈCHE, *op. cit.*, pp. 138-139)。
- 12) この内的葛藤が描かれている箇所を引用する——「もう一度アンディイへ戻るべき

だろうか。これが、オクターヴのしきりに自問していたことだった。彼は自分ももう母を愛していないことに慄然とした。なぜなら、アンディイへ戻る理由づけのなかに、もう母のことがまったくはいていなかったからである。彼はゾヒロフ嬢に会うことを恐れていた。ときどき、こんな反省が浮かんでくるだけに、それはなおさらのことだった。だが、おれがしていることはすべて欺瞞ではないのか。/ そうだ、と自分に答えることはためらわれた。すると誘惑の声は言うのだった。お母さんにはそれを約束したのだから、もう一度会いに行くのは神聖な義務ではないのか。すると良心は声を荒げていうのだ。とんでもないことだ。そんな返答は言い逃れにすぎない。おまえはもう母親を愛してはいないのだ」[129]。

- 13) ミッシェル・クルゼは、このことばをオクターヴの罪悪感の反映という観点からも取りあげている。Voir CROUZET, *article cité*, pp. 98-99.
- 14) したがって、悲劇の原因をあくまでもオクターヴのナルシズムに求めようとするショウシャナ・フェルマンの解釈には同意しがたい。Voir FELMAN, *op. cit.*, pp. 180-184.
- 15) ロラン・バルトは「物語の構造分析序説」のなかで、抒情詩を要約すると「愛」と「死」という記号内容に還元されると指摘している (voir Roland BARTHES, «Introduction à l'analyse structurale des récits», *Communications*, n° 8, 1966, p. 25)。次にあげる第1章のエピグラフに、叙情詩的なテーマが暗示されているだけに、バルトの指摘には多く示唆するものがある——「古い、なんの変てつもない歌だ。/……飾りけのない真実の歌だ。/うぶな恋心を歌いあげた。/『十二夜』第2場」[29]。
- 16) ジャン・ベルマン＝ノエルは、過去になされた『アルマンヌ』の解釈における精神分析の概念の誤った適用を指摘しつつ、「梅毒」などの例を挙げながらテキストからはオクターヴの秘密を〈性的不能〉だけに限定できないのではないかとしている。Voir Jean BELLEMIN-NOËL, *L'Auteur encombrant, Stendhal. «Armance»*, Lille: Presses Universitaires de Lille, 1985, p. 29.